

今日の旧約と福音書は、それぞれ、農作業をしていたギデオンと、漁師だったシモン・ペトロたちが、神様の仕事をするために召される、というお話でした。そして、共通して言えることは、どちらも臆病で、決して自ら進んで、神様のお役に立とうと、志願するような人たちではなかった、ということです。

ギデオンは、イエス様の時代より1100年くらい前の人物です。モーセとその仕事を受け継いだヨシュアによって、エジプトから約束の地カナンに移り住んだイスラエルの人々は、まだ12部族が別々に住んでいて、ギデオンの住んでいたオフラのあるエズレエル平原には、肥沃な土地が広がっていました。ここはイスラエルの北部、ガリラヤにあって、この平原の北側の丘の上が、ずっとあとイエス様の育ったナザレですが、このギデオンの住むオフラは、小麦がよく育つところです。しかし、その収穫を狙って、前からこのあたりに住んでいたミディアン人が襲ってきては、小麦を盗んでいました。それが恐ろしいので、ギデオンは、酒ぶねの中で、隠れるようにして、小麦を脱穀していたのです。そんな臆病なギデオンに対して、主の御使いは、「勇者よ、主はあなたと共におられます。」と呼びかけました。

彼は、命じられたことを恐る恐る実行していきました。今日のところでは、自分たちの部族の中に造られてしまった偶像を、夜のうちにこっそり壊したりしましたが、その後も、神様の力を確信するために、いろいろ神様の力を示してくださるようにより要求し、やがて、その神様の言葉に信頼して、ミディアン人たちを相手に少数の兵士で戦いを行って、勝利することになります。

それと同じように、漁師のペトロも、イエス様が逮捕されたら、自分はイエスなんか知らない、と言って逃げ回った人物でしたが、やがて勇ましく伝道し、ローマに行って、最初のローマ教皇になり、バチカンの丘で逆さ礫になって死んでいった人物です。このペトロが弟子になった時のいきさつが、今日の福音書には語られています。「イエス様がゲネサレト湖畔に立っておられると、」というところから始まりますが、ゲネサレト湖というのは、イスラエルの北の方にある、ガリラヤ湖のことです。イエス様の活動は、ほとんどがこの湖の周りで起こったことです。

さて、そのイエス様の所へ、群衆が「神の言葉を聞こうとして」押し寄せて来た。と書かれています。この群衆は、イエス様に奇跡を期待したのではなく、苦しんでいる自分たちの現実に対して、神様は何を言ってくださるのか、イエス様の口から出る神様の言葉で、生きる勇氣、本当の喜びとか希望を見出したくて、押し寄せて来ているのです。故郷のナザレの人々が、色眼鏡でイエス様を見ているのとは違って、真剣に求めていたのでした。

それでは、ペトロもそんな熱心な群衆のひとりだったのか、と言えば、そうではなかったと思われます。群衆から離れて、二そうの舟が岸につけられて、漁師たちは、舟から上がって網を洗っていたのです。どうも彼らは、夜通し働いたけれど収穫がなくて、ガックリしながら次の漁の準備のために網を洗っていたのでしょう。かたや熱心に、み言葉を聴こうと押し寄せる群衆。かたや落胆して網を洗っている漁師たち。ところが、イエス様は、落胆しているシモン・ペトロたちに声をかけられたのです。このあたりが、ギデオンと似ているかもしれません。

イエス様は、ペトロに、沖へ漕ぎ出すように頼みます。疲れて網を洗っているのに、イエス様とその話を聞こうとする群衆と一緒に自分の方へやってきて、ペトロはどんな気持ちだったのでしょうか。みんなが求めている有名な先生から、個人的に声をかけられて、誇らしく思えたのでしょうか。あるいは、厄介な仕事させられるなあ、とイヤな気分だったのでしょうか。今日の福音書より少し前のところで、シモンのしゅうとめが高い熱で苦しんでいるのを、イエス様に治していただいたことが書かれていますから、今日のところは、舟にイエス様を乗せることは、断れない、とあって協力したのではないのでしょうか。

ところが、話が終わると、イエス様から、「沖へ漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい。」と言われました。説教をするために、音響効果のいい、沖へ漕ぎ出すのならまだわかるけど、真昼間に漁をするのは、愚かなこと、とペトロには思えたでしょう。それは、3週ほど前に読んだ福音書、結婚式の披露宴で、もう宴もたけなわの時に、入り口に足や手を洗うために置かれた水瓶に、わざわざいっぱい水を入れるように頼まれた召し使いたちの心境とも似ているかもしれません。しかし、ペトロにとっては、水を汲んだ召し使いたちより、大きな挑戦だったと思われまふ。説教はともかく、網で漁をするのは、自分の方が、専門的な知識を持っています。しかし、あえてそれを乗り越えて、イエス様の言葉に従うことにしたのです。ここが大切なんでしょう。自分の経験を横に置いて、み言葉を聞くことです。

「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」

その結果は、どうだったのでしょうか。「おびたしい魚がかかり、網が破れそうになった。」そして、もう一そうの舟に助けてもらいましたが、舟が沈みそうになるほどの魚が獲れたのです。このあと、ペトロは、イエス様の足元にひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です。」と告白します。

何が罪深いのでしょうか。ただ、たくさんの魚が取れたことを驚くだけなら、「ありがとうございます。これで、今日もたくさんのお金が手に入ります。」と感謝を述べればいいことでしょう。しかし、ペトロの心は、感謝ではなく、自分の罪深さで満ちていました。

彼は、泥棒をしたわけでもないし、嘘をついたわけでもありません。しかし、自分が落胆して網を洗っている時、目の前に生きたみ言葉を語る、力のある方がおられるのに、その方の言われることに半信半疑で、なかなか信用しようとしていなかった、不信仰な自分がいたことを恥かしく思ったのです。網を降ろした時、ペトロはどんな気持ちだったのでしょうか。

「多分だめかもしれない。しかし、イエス様が言うなら、しかたがない。やってみるか。」大した期待もせず、ポーっとやっていた。その程度の信仰しかない。それは、シモン・ペトロに限らず、私たちの信仰も似たようなものかもしれません。自分の能力だけを信じて、過去の経験から、これはとても現実的ではない、と判断してしまう。それが私たちの普段の生活ではないのでしょうか。

神様の御言葉を信じないで、自分の経験から、素直に網を降ろそうとしない、そうした不信仰を、シモン・ペトロは痛感して、「わたしは罪深い者です。」と言ったのでしょうか。

ところが、イエス様は「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と言って、罪深いペトロに近づき、その不信仰な者を用いて下さるのです。

ギデオンやペトロのように、今日の使徒書を書いたパウロも、同じ経験をした人です。

今日の使徒書で、パウロは、イエス様が復活されて、多くの人に現れたこと、それが自分の伝え聞いた福音そのものだと説明します。そして、自分自身も、その復活の主に出会ったんだ、と語る時、自分のことを紹介します。今日の使徒書です。

「そして、最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さい者であり、使徒と呼ばれる値打ちもない者です。神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」(Iコリント15：8～10)

このように書いています。ペトロやパウロの伝道を詳しく書いたのは、福音書の次に来る、使徒言行録という書物です。以前は使徒行伝と呼んでいました。これは、実は使徒自身が働いた、というより、パウロに言わせれば「神の恵み」なんだろうが、一般には、聖霊の働きですので、使徒行伝は「聖霊行伝」とも呼ばれています。聖霊というのは、息とか風とかのように目に見えない空気の動きです。イエス様の弟子たちは、風に吹かれるように、神様の示されるところへ行って、聖霊が語らせるまま、福音を語っていった、ということでしょう。

結婚式の時に召し使いたちが水を汲んだり、漁師たちが網を降ろしたりして、驚くべき出来事に出会うと、それが、最初は自分には理解できないことでも、その結果、予想外のこと、素晴らしいことに出会うなら、その人たちの生き方は変わります。その出来事に出会うなら、それからは、もっと素直に従える者になるでしょう。そういう行動をさせる力を、み言葉の力、聖霊の力と呼び、それに従うことを私たちは信仰と呼びます。

「イエス様の言葉によって動かされている」という、力を感じるなら、私たちは、聖霊の風に突き動かされ、驚くべき奇跡を見ることになるのではないのでしょうか。

私たちは、思いがけず、人を助けることがあります。重い荷物を持って苦勞している人から助けを求められると、最初は面倒と思っても、思いがけない感謝の言葉を言われ、その後面白い会話などが展開すると、次の時は、別の人にも自分の方から「何かお助けしましょうか？」と言えるようになる。その結果、互いに重荷を担い合う、という聖書の教えが実現してゆくのではないのでしょうか。み言葉に従うとは、そのような出会いを通して、奇跡のように私たちの間で展開してゆくのだらうと思います。